



Title	Heinrich Schlier, Grundzüge einer paulinischen Theologie
Author(s)	阿部, 包
Citation	基督教学, 15, 30-35
Issue Date	1980-07-09
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46387
Type	other
File Information	15_30-35.pdf



[Instructions for use](#)

Heinrich Schlier, *Grundzüge einer paulinischen Theologie*, 223 S., Freiburg・Basel・Wien (Herder Verlag), 1978.

阿 部 包

既に出版以来二年が経過しているので、新刊評というわけにはいかないが、その点はお許しを願っておく。著者ハインリッヒ・シュリーアは、*Evangelisches Kirchenlexikon*, Register Bandによれば、一九〇〇年三月三十一日ドナウ河畔ノイブルクに生まれ、一九二七年牧師、一九二八年イエーナ大学私講師、一九三〇年マールブルク大学私講師、一九三五年ウッパタール教会大学講師、一九四五年ボン大学新約学・古代教会史担当正教授、一九五二年同大学文学部名誉教授、一九五三年プロテスタントからローマ・カトリックに改宗、という経歴の持ち主。学界における活動は、一九二九年の「イグナ

ティウスの手紙の宗史的的研究」という論文から始められた模様である。改宗前の代表的業績は、マイヤー注解叢書の『ガラテア人への手紙』第一〇版（一九四九）であろう（一九七一年に一四版・シュリーア本改訂第五版）。改宗後は、積義的な論文や講演をまとめた三巻からなる論集（一九五六年から七一年。『教会の時』*Die Zeit der Kirche* 『新約聖書を考える』*Bestimmung auf das Neue Testament* 『時の終わり』*Das Ende der Zeit*）等にその業績を見ることができ、中でも第一に上げられるべきは、ヘルダー注解叢書の『ローマ人への手紙』（一九七七）であろう。また一九七〇年には『イエスの時代』*Die Zeit Jesu* という、彼の古希を祝した記念論文集が出されている。恰度研究活動に脂が乗り出した頃に改宗ということで、その業績のほとんどはカトリック系のヘルダー社から出版されることになる。今年八〇歳。ここで取り上げる『パウロ神学の基本的特徴』は、彼七八歳の出版である。書き下ろしの一冊の書物としては、ひょっとすると最後になるかもしれない（そうならないことを祈る）。この点については、著者自身にも何らかの自覚があったもののように、本書は改宗を中に挿んでほぼ六〇年に及ぶ新約学者としての研究生活から生

まれた一種の信仰告白の書としても読まれうるように思われるのだが、このように感じるのには一人私だけであるうか。

まず、本書の意図を見ることから始めよう。著者の目的は使徒パウロの神学の歴史的叙述ではない。つまり、歴史的批判的な研究方法に基づいて論が進められるわけではない。これは本書の表題にも表われている。

Grundzüge einer paulinischen Theologie であって、*der Theologie des Apostels Paulus* ではないのである。

したがって、その内容から著者がパウロ的と認める手紙はすべて本書の資料となる。問題はこの「パウロ的」の意味だが、「パウロの手紙のケーリュグマ(宣教内容)によって内容的に規定され、使徒パウロの神学と本質的な関係を有する」というのが、著者の説明である。この限りでのパウロ的な神学を、歴史的にはなく、体系的に叙述しようというのが彼の意図である。この体系的叙述の核心は現代的な神学的考察 *eine gegenwärtige theologische Besinnung* であり、先のケーリュグマとの現代的な対論が要となる。彼は *Aussprache* と言ふ、*Auseinandersetzung* と言ふ、*Dialog* と言ふ。「真理は、

使徒の人間的な言葉による隠蔽を貫いて聴き取られ、熟考されて、語り出されねばならない」。こうした言葉の背後には、著者の師ブルトマンの例の〈非神話化論〉の残響が聞こえてくるような気がするのだが。

このような方法論を支えるものとして、現代という時代に対する著者の危機的な認識がある。統一的なキリスト教的世界観が崩壊して既に久しい。現代はいわゆる多元主義的な時代 *Die pluralistische Zeit* である。加えて、神学の現状に対する憤りの感情が、現代世界の基調として存在している。今日、情報化社会という呼称すら色褪せるほど、われわれは無意識のうちに情報に左右されて生きているが、問題は言葉そのものが本来の機能を喪失して情報と化していることだ。このように言葉の危機という状況を呈している現代は、言葉によって生きる者―作家・哲学者・思想家―にとって極めて困難な時代である。しかし中でも最も困難な立場にあるのは神学者だ、と著者は言う。キリスト教に対する反対感情の普遍性、そして言葉の情報化(ここでは、神の言葉も一片の情報にすぎないだろう)。この二重の困難・危機の中で、聖書において語られていることを現代世界に向けて新たに語り直すという神学者の重大な課題を前にして、著者

自ら襟を正すのである。ここで、神学者（ひいてはわれわれ自身も）がなすべきことを三つ著者は上げる。一、現代の精神と生をめぐる状況を自覚すること。二、ますます増大する現代精神の反キリスト教性という基調を拒絶する決断をし、同時に、人間の能力を越えた聖書の言葉を承認すること。三、あらゆる解釈学的方法を用いて聖書の言葉を聴き、理解すること。言葉の危機の時代に生きる現代の神学者にとっての、このような課題に応えようとしたのが本書、ということになるのだが、この課題そのものに問題がないわけではない。「自覚」と「理解」は問題がないでしょう。しかし、二番目の課題はどうか。現代のユートピア主義を、キリスト教終末論とは似て非なるものとして断罪する著者にとって、むしろ本書はこの課題なのではないか。人間精神の、否、人間存在の唯一のあり方としてキリスト教信仰のみを認め、聖書の言葉をそのまま受け容れること。これが著者の唯一基本的な態度のように思われたいではない。たしかに、キリスト教神学者としては、一見当然のように思われるかもしれない。しかし、はたしてそうか。実際には、これで事が解決しないところに、現代のキリスト教が置かれた状況の困難性があるのではないか。

とりあえず批判は一時中断、この辺で本書の構成を紹介しておく。本論は全部で五章からなる。

第一章、「神である神」 Der Gott, der Gott ist. 1. 近き神 / 2. 与える神 / 3. 一なる神 / 4. 超越神 / 5. 明らかなる神 / 6. 全能なる神 / 7. 神の義。第二章、「あるがままの世界」 Die Welt, wie sie vorkommt. 1. 罪 / 2. 律法 / 3. 「身体」と「肉」 / 4. 死。第三章、「イエス・キリストにおける神の義の出現」。1. キリストの死の出来事 / イエス・キリストの死者からの復活の出来事 / 3. 復活者の出現 / 4. 人間イエス / 5. イエス・キリストにおける神の義 / 6. 三つの包括的な「定式」。第四章、「霊と福音」。1. 霊 / 2. キリストの身体 / 3. 福音。第五章、「信仰」。

このような構成をもつ本書であるが、論述の基本的な軸となるものは、先にも触れたが、パウロの手紙が提示するケーリニグマとの「現代的な対論」であり、使徒パウロの手紙との「対決」であり、「対話」である。著者にとっての問題は、「パウロ神学とは何か」であるが、同時に、あるいはさらに重要な問題として、「キリスト教信仰とは何か」がある。そこには著者自らが決断した信仰があり、これこそが唯一の信仰であるという揺ぎない

確信がある。本書の性格上、パウロの生涯の歴史的的背景に関する記述をそこに期待することはできない。また、「対論」・「対決」・「対話」を妨げるが故か、注の類は一切ない。七八歳の老大家のこととて、従来の諸学者の説を文字通り自家菜籠中のものとしているのではあるうが、読む側に見れば若干心もとない、というのが本音である。

第一章、「神である神」。(今世紀初頭にも義認論をめぐる theozentrisch-anthropozentrisch の議論がなされたが) R・ブルトマンは、「パウロ神学は同時に人間学である」(… ist die paulinische Theologie zugleich Anthropologie) という釈義上の有名なテーゼを提出し、人間学をめぐるその後の議論の種を蒔いたが、シュリーアは、「神学の問題は徹頭徹尾 *erstlich und letztlich* 神であり、決して人間や世界ではない」と述べ、「神学は神学であるか、それとも人間学か、あるいは宇宙論なのか？」という逆接的な問いを投げかける。そして彼は、パウロにとっても新約聖書全体にとっても、神があらゆる思考と生の初めであり目的であり、あらゆるテキストのアルファでありオメガである、と断言する。こうした確信の下に、神に関して七つの属性が分析されている。こ

の章の表題が自ずから語るように、いわゆるキリスト教の神のみが唯一の真なる神であり、他の神のごときものは一切神ではない。この神は端的に存在する神であり近き神である。また永遠に万物の存在の源である神は、与える神である。神と交わる人間の本来的なあり方は、祈り・感謝・讚美である。この祈り・感謝・讚美は被造物本来の存在様式として、重視されており、本書における一つのキー・ワードと言える。神はまた一なる神である。

神は多神に対立して一なる神であり、全人類にとっての一なる神である。この神は、その超世界性において把握不可能な本質を有する神である。この神は、その栄光の光の中に自らを現わし、また同時に常に隠す。つまり栄光に身を包む限りにおいて現われるのである。被造物は、この神をさし示す賜物である。では被造物における神の啓示はどのように知られるか？ 被造物から思考によって承認されるのであって、論証されるのではない、と著者は言う(傍点は私)。もう一つ、イサヤエルに対する啓示。そして神の啓示の完成としてのイエス・キリストの出来事が来る。この神は全能の神・創造者である。著者はここで、単に哲学者 *der Philosoph* の問いとしてハイデッガーの『形而上学入門』の冒頭の問いらしきも

のを引用する。「何故、存在があり無があるのではないのか」*Warum ist Sein und nicht Nichts?* (因みに哲学者の原文は *Warum ist überhaupt Seiendes und nicht vielmehr Nichts?*) この問いに対する答えが、神は神であり全能の創造者だから、というものである(これでは哲学者先生も愚かな笑みを浮かべるしかないではないか)。この神は就中死者を復活させる神として現われる。神はイエス・キリストにおいて義を示し、人を義とする。怒りの神・愛の神・父であるこの神は、すべての人間が救われ真理を悟ることを望んでいる。——このように、信仰と神学の源である神を、極めて聖書に忠実に扱っているのが第一章である。

第二章、「あるがままの世界」。論述の対象は罪と死の支配下にある世界である。ここでも新しい議論は見出されず、従来通りの説明がシェリーアらしい時に屈折した文体で述べられる。まず世界は何か。神以外のすべて、存在と存在するものの全次元、つまり被造物、しかし人間世界のみをしばしば示す。そして再び創造者に対する感謝と讚美の強調である。そこで実際の「あるがままの世界」はどうか、ということになる。神に対する不服従としての異邦人の罪、自己義認という幻想によって神に

敵対するユダヤ人の罪、続いて、これらの罪の機会となる律法が、いわば型通りに説明される。しかし、律法の終わりとしてのキリストと共に、信仰者にとって律法がキリストの律法となることをも忘れずに書くあたりに、カトリシズムの香りが感じられはしないだろうか。「身体」と「肉」に関しては、用語の多様な意味の整理を試みたものと言えよう。罪において、この世と肉は反神的の性格を獲得する(永遠の神としての世界)、と著者は述べる。そして罪の報酬・支配形態としての死が語られ、人間は被造物として善であるが、その被造性に反逆する者として悪であると述べられる。しかし同時に、身体・魂・霊の痛みと呻きは、絶望のみならず希望の結果・徴候であることが示される。

第三章、「イエス・キリストにおける神の義の出現」。ここで問われるのは、キリストの出来事の意味である。この出来事の鍵は、彼の死において何が起こり、死が何をもたらすのか、である。まず、人間に対する犠牲・神に対する服従を示す終末論的な救済史の中心的出来事である。しかし、この歴史的な出来事の本来の意味は、一般的客観化を旨とする外的な考察に対しては常に隠されている。つまり信仰の経験の領域に属するのである。次

に復活の出来事。これは神の力の成果であり神の行ないである。著者は注意すべき点を三つ上げるが、ここでは二つ紹介する。ケリーユグマの中にのみキリストの復活を見るならケリーユグマから全次元が奪われること。復活したのは十字架にかけられたイエス・キリストであること。これは明らかに、ブルトマン『新約聖書神学』三三節C項に対する批判として読める。シュリーアは師を批判して強い口調で言う「何事も起こらなければ、何も語られはしないのだ。……復活は完全な意味で出来事だ」と。この出来事によってもたらされたのが神の義である。「人間イエス」、「イエス・キリストにおける神の義」においては、神の側からの世界との和解をめぐって救済史を重視した叙述がなされる。「包括的な三つの『定式』」においては、キリストの出来事の成果を示す定式が分析される。einai tou Iésou Christou, einai toi Iésou Christói, en Iésou Christói 等であるが、これらの意味が en Adam の用法との類比によって示されている。

第四章の「霊と福音」と第五章の「信仰」は一緒に扱うことができる。ここでも救済史的関連が重視されている。霊は神の自己開示の力・生命を与える力・復活させる力である。キリスト教的実存は霊における実存である。

る。この霊の実が信仰・愛である。霊によって人間は新たな開かれた現存在を獲得し、神と隣人に自らを開く。霊の共同体がキリストの身体である。このように、ここではキリスト・霊・教会の本質的一体性が語られる。そして霊の言葉・神の言葉・信じる者に救いを与える力としての福音が詳述される。この福音を聴いて服従することが信仰である。シュリーアは、ある意味で極めて素朴な信仰の回復を叫んでいるように思われる。それはイエス・キリストの人と出来事との分離を再度一致させることを求める信仰なのである。

このような素朴な信仰の回復は、彼の「対論」という方法論とも密接に結びついているように思われる。そこには今日の新約学が歴史の側に大きく振れていることが関わってこよう。信仰は疑いようもなく危機に瀕しているのだ。著者は本書によって、現代がなおも教会の時であり信仰の時であること、そしてそれが揺ぎないことを示そうとしているように見える。本書は著者自身の信仰告白であると同時に、そのまま宣教の言葉ともなっている。文体もまたそれに相応しい。しかし、視点を変えてみれば、護教論の色彩も強い。いや、それも私にはない信仰の堅固さの現われとして、よしとしよう。